

イメージとしてのアオサギ

北海道アオサギ研究会

松長克利

野付にて

1990年代半ばの一時期を私は道東の標津町で過ごした。当時、標津の町外れには200巣を超えるアオサギのコロニーがあり、そこでアオサギの子育ての様子を観察するのが目的だった。そこから10kmほど南へ下ったところに野付湾がある。湾はホッカイシマエビの漁場となるような浅い水域で、潮が引くと広大な浅瀬が現れる。そうすると、何百というアオサギが一斉に漁を始めるのだ。作者の名を失念したが、「青鷺の 天下となれり 野付湾」という句がある。まさにそういうところだった。



ご存知の通り、野付半島は観光地であり、春から夏にかけて多くの観光客が訪れる。観光シーズンはアオサギの繁殖シーズンでもあるため、観光客がこの壮大な光景を目にすることは多い。ところが、彼らは野付湾を眺めて、「ああ、なんにもいないねえ」と言って落胆して去るのだった。彼らの目的はタンチョウか、そうでなければオジロワシと相場が決まっていた。目の前に何十、何百というアオサギがいるのに、彼らの目にはまるで入ってこないのだ。なんと寂しいことだろう。

そんなことが幾度もあった。そのたびに、なぜこんなにアオサギは人気がないのだろうといつも思った。アオサギはどこにでもいる鳥だからと言う人もいる。けれども、私にはそれだけが理由ではないように思えた。現に、海外に目を移せば、アオサギはその個体数の多さにもかかわらずとても人気のある鳥なのだ。イギリスは1928年から、もうかれこれ80年以上も全国のアオサギコロニーをモニタリングしつづけている。その人気ぶりは、日本では想像できないほど多くのアオサギ関連商品が売られていることでも察せられる。アオサギの代替種としてアメリカに生息するオオアオサギの場合も同じで、こちらは本家アオサギに輪をかけて人気が高い。保護活動も各地でとても精力的に行われている。なにしろ、アメリカ最大の鳥類保護団体であるオーデュボン協会のロゴマークからしてオオアオサギなのだ。とって、当地のアオサギ、オオアオサギが希少な鳥だというわけではない。状況は日本のアオサギと似たり寄ったり。特殊な状況があるわけではない。たぶん彼らは単純にアオサギやオオアオサギが好きなのだ。そんなことをあれこれ考えていると、日本人のアオサギに対する関心の低さがますます不思議に思えてくるのだった。

この違いの原因はどこにあるのか。今回ここでは、人々がアオサギに抱くイメージを、古今東西の神話や宗教、文学などの中から拾い集め、文化的側面からその原因を探っていきたいと思う。

アオサギが神だった頃

今から4000年前の古代エジプト。ラーが太陽神として君臨し、オシリスが冥界を司っていた地で、ベヌウという名の1羽の聖鳥が崇められていた。他の何千という神々と同じく、ベヌウも最初は田舎で崇拝される一地方神にすぎなかった。それが千年、二千年を経て、多くの神々が忘れ去られる中、ベヌウはしなやかに生き続け、最終的にエジプト神話の中でも極めて重要な位置を占める



ことになったのである。この聖鳥のモチーフになったのがアオサギなのだ。右の絵はラムセス2世の王妃ネフェルタリの墓に描かれた壁画で、頭の後ろに伸びる冠羽といい、側頭の黒のラインといい、アオサギの特徴がよく表れている。



そんなアオサギ神がエジプトで担っていた役割とは何だったのか。ベヌウの名は「上る」とか「輝く」などの語に由来するとされている。ナイルの川面から朝日を浴びて飛び立つアオサギをイメージすれば、これらの語を連想するのは易しい。しかし、「上る」や「輝く」という語でもっともイメージしやすいものは太陽である。このイメージの連鎖により、ベヌウは太陽神ラーと密接に結びつくことになった。両者の関係は、太陽を頭にいただくラーとともにベヌウが「太陽の船」に乗っている場面に象徴されている（右図）。それだけではない。エジプトの神話では太陽は卵から生まれたことになっており、その卵を温めて孵化させたのが他でもないベヌウだとされているのだ。つまり、ベヌウがいなければ世界は始まらなかったのである。

ところで、このベヌウが頭上にいだけ重そうな冠、これはアテフ冠と呼ばれるもので、本来、冥界を司る神、オシリスがかぶるものとされている。それをベヌウがかぶるとするのは、オシリスとベヌウが同一視されていることに他ならない。実際、ベヌウはラーと同様、オシリスとも深く結びついているのである。しかし、なぜ「上る」や「輝く」のイメージをもつアオサギが冥界と関係があるのか。これについてはエジプトの死生観を考えてみる必要がある。エジプトではファラオのような権力者は、死後、ミイラとなって復活を待つことになっている。つまり、エジプトにおいて、死は再生と直結する概念なのだ。ベヌウが象徴する太陽は、一日の終に西に沈んだ後、翌日、東の空に復活する。これは死と再生のメタファーである。また、アオサギは乾季になりナイルの水が引くとどこかに去り、洪水期になると再び戻ってくる。これも死と再生の暗喩に他ならない。アオサギの季節移動、太陽の運行、死後の復活、要するに、これらは全て「再生」のイメージでくくられる同じ出来事なのだ。

ベヌウがオシリスといかに強く結びついていたかは『死者の書』にベヌウがたびたび登場することからも分かる。『死者の書』というのは、死者とともに棺の中に取められるパピルスに書かれた巻物で、そこには死者がオシリスの審判を受け楽園に到達するのに必要な呪文がことごとく書かれている。その第83章にベヌウに変身するための呪文がある。英語版のものを訳すとだいたい次のようになる。

「我は原初の丘より飛びいでしものなり。我はケペラのごとく来れり。我は植物の如く芽を吹きたり。我は亀の如く甲羅の中に隠れたり。我は全ての神々の種なり。（中略）我は来た。我は玉座に上りたり。我はクーを授けられたり。我は全能なり。我は神々の中で神格を授けられたり。我はケンス、全ての力の王なり」

まあ、このような調子で、訳したところで何を言っているのか分からないのだが、ベヌウが死者に対し大きな影響力をもつ存在だったのは確かなようだ。

つまり、古代エジプトのアオサギは、ベヌウという名の下に、上り、輝き、再生するという、非常にポジティブかつ生命力に溢れたイメージを有する鳥だったのである。そして、このアオサギのイメージは時代を下ってギリシャ、そしてローマへと受け継がれることになる。フェニックスと名前を変えて。

火の鳥の時代

『死者の書』に登場するベヌウは、後代になると、英語ではその名前がフェニックスに変わる。フェニックスをギリシャ世界に最初に紹介したヘロドトスは、その著書『歴史』で、「私はその姿を絵でしか

見たことがない」、とその実在性を疑いつつ、その鳥の姿や生態を具体的に書き留めている。それによると、フェニックスの形状はもはやアオサギの面影を留めておらず、むしろタカに近い。そして、その羽毛は金色と赤ということになっている。なぜベヌウ（フェニックス）の姿がアオサギからタカに変化したのか、その理由は定かではない。ただ、『死者の書』について言えば、最初は何巻もの長さをもつ重厚な文書だったものが、年月を経るとともに次第に俗化し、好みの断片を適当につなぎあわせた形だけのものになっていく。間違いが起こる余地はいくらでもあったのだ。『死者の書』には「ベヌウの頭をもつ美しき金色のタカ」という一節がある。アオサギからタカへとイメージが変わったのも、この辺の文章を適当に解釈した結果かもしれない。ただ、そうした間違いやいい加減さが時として文化の多様性を押し広げる重要な要素となっているのも事実なのだ。もし、ギリシャに伝わったフェニックスが、その後もアオサギの姿で飛び回っていたとしたら、現在、我々が知るようなフェニックス伝説は、果たして存在していたかどうか。



ともかく、ギリシャに伝わる頃にはフェニックスはアオサギの原型をほとんど留めないものになってしまった。しかし、ベヌウのもっていたイメージはフェニックスに形を変えた後もしっかりと受け継がれていった。太陽のイメージはフェニックスでは炎のイメージとなって伝承され、再生のイメージは自らを炎で焼いた後、その灰の中から復活するという逸話として語り継がれたのである。

ところで、一度はフェニックスのものとなったこれらのイメージだが、アオサギのもつ属性として蘇ったことが、その後、ただ一度だけあった。紀元の変り目に活躍したローマの詩人オヴィディウスは『変身物語』の中で、トロイ戦争当時、Ardeaという町が陥落した場面を次のように描写している。

「異国人の剣がこの都を滅ぼし、家々が熱い灰に埋もれたとき、うず高い廃虚のなかから、見知らぬ鳥が舞いあがり、羽ばたく翼で灰を打った。悲しい鳴き声、やせ細ったからだ、青白さ、それに、滅んだ都に似つかわしいすべてのものが、この鳥のなかに残っていた。アルデアという町の名も、「蒼鷺」として残っている。おもえば、アルデアの都は、われとわが翼を打ちつけることでみずからを嘆いているのだ」

この神秘的で詩的な物語に登場するアオサギは、一面では自分を燃やして灰の中から自らを再生するフェニックスのイメージそのものである。しかし、このArdeaの町から飛び立つのはフェニックスではなくアオサギなのだ。Ardeaという町の名前がアオサギのラテン名だと分かれば、作者がいかに恣意的にアオサギとフェニックスのイメージを融合させようとしたかが分かる。

ただ、残念ながら、アオサギとフェニックスの邂逅はこれが最初で最後だった。このあと、両者は再び相まみえることなく、アオサギはより現実味のある生身のアオサギとして、フェニックスはより神秘的、伝説的な生き物として、それぞれ別の道を歩むことになるのである。

寿命の短かった生身のアオサギ

アオサギについては、それより少し前、といってもオヴィディウスより300年以上も前になるが、曇のない目で詳細な観察を行った人物がいた。アリストテレスである。彼の著書のひとつ『動物誌』にはアオサギに関する記述がいくつか見られる。たとえば、次のような説明がある。

「灰色のサギは巣についたり、交尾したりするのが困難である。すなわち、交尾しながら鳴き立て、「眼から血が出る」といわれ、（後略）」

交尾するのが困難かどうかはひとまず置くとして、注意したいのは交尾のとき「眼から血が出る」という記述である。これは虹彩が婚姻色を呈することを指していると考えられる。アオサギの虹彩は興奮の度

合いが高まると赤くなる。この現象は必ずしも交尾時に限られるわけではないし、もちろん血を流しているわけでもない。しかし、注目すべきは、虹彩の色のわずかな変化をも見逃さない卓越した観察眼である。双眼鏡もなく肉眼で観察するしかなかった時代に、この観察の正確さにはまったく驚くほかない。

ともかく、アリストテレスにかかると、全てのものはありのままに観察され、白日のもとで客観的に分析、解釈される。もしかすると、当時の人々がアオサギに対して抱いたイメージは、今日、我々が抱くアオサギのイメージとそれほど違わなかったかもしれない。

しかし、そうした時代は長くは続かなかった。時代はやがてギリシャからローマへと移り、その後、キリスト教がヨーロッパ世界を席卷するようになると、アオサギには再び幾重もの文化的フィルターがかけられ、作為的なイメージだけが独り歩きするようになるのである。

Godがもたらしたもの

まずは、聖書に書かれたアオサギから見てみよう。旧約聖書の『レビ記』に次のような記述がある（『申命記』にもほぼ同様の記述あり）。

「鳥のうち、次のものは、あなたがたに忌むべきものとして、食べてはならない。それらは忌むべきものである。すなわち、はげわし、ひげはげわし、みさご、とび、はやぶさの類、もろもろのからすの類、だちょう、よたか、かもめ、たかの類、ふくろう、う、みみずく、むらさきばん、ペリカン、はげたか、こうのとり、さぎの類、やつがしら、こうもり」

つまり、アオサギはユダヤ人たちにとっては厭わしい鳥だったのだ。ただし、これは飽くまで食を禁じるための戒律であって、これらの鳥そのものの本性が批判されているわけではない。実際、ここに挙げられた鳥のうち、ペリカンやヤツガシラなど、人々に行動規範を示す目的で、その習性が好意的に紹介されている鳥は多い。アオサギもそうした鳥の一種であった。もっとも、その手の話が書かれているのは聖書ではなく、『フィシオログス』や『ベステイアリ』といった庶民向けの寓話集である。これらの本はアリストテレスをはじめとした博物学の知見をキリスト教の教義に合うように都合よく説明したもので、聖書を別にすれば中世を通してもっとも広く読まれた書物とされている。この中では動物たちはどのように紹介されていたのか。『フィシオログス』におけるアオサギの項目から引用してみよう。なお、キリスト教の教訓が書かれた部分は省いた。

「この鳥は、数ある鳥の中でもとりわけ利口だ。巣はひとつ、ねぐらはひとつ、いくつもの休み場を求めない。いったん住みつくと、そこに止まり、そこで眠る。けっして死んだものを食べない。あちこち飛んでまわることもない。かれのねぐらも、かれのえさ場も、きまって同じだ」

冒頭の、サギが最も賢いという部分には異論のある人もいると思うが、他にも本当にサギのことを言っているのか疑いたくなる部分が多い。実際、別の版では同じ話がアオサギでなくオオバンの説明になったりするのだから始末に負えない。

古代エジプトでベヌウがフェニックスへ化けてしまったように、キリスト教の支配した当時の世界では、ある動物がいつの間にかまったく別の動物に置き換えられるという例は多い。この時代は聖書をもとに文化がつくられているといっても寡言ではないが、その元となるべき聖書（この場合は旧約聖書）が、どうも多くの間違いを生み出しているようなのだ。もともとヘブライ語で書かれた聖書は、ギリシャ語やラテン語を経て、さらに英語や各国語に訳される。このため、翻訳のたびに誤訳の危険が付きまとう。ま



して、翻訳にたずさわる神学者は、鳥や動物などろくに知らない場合が多かっただろうし、聞いたこともない動物名が出てくれば、自分の知っている動物の名を適当に当てはめたであろうことは容易に想像できる。ただ、前にも書いたように文化とはそうしたものかもしれない。間違いが必ずしも悪い結果をもたらすとは限らない。ときには嘘から出た真のように、間違いは新たな考え方や物の見方を創造する契機となる可能性も秘めている。それはもしかしたら、生物のDNAの塩基配列にときに間違いが起こるのと同じで、文化の多様性と頑健性を増すためには必要なことなのかもしれない。

ところで、聖書では前述の『レビ記』、『申命記』以外にサギの登場する場面はない。ただ、間違っただけの鳥に書き換えられたと思われる箇所はある。詩篇104章17節に、「このとりはもみの木をそのすまいとする」という一節がある。ギリシャ語版ではコウノトリのところはHerodiiとなっているので、この部分は本来サギと訳するのが正しい。それが、英語や日本語に訳されるうちに勝手にコウノトリに化けてしまったのだ。まあこの程度の間違いはよくあることなのだろう。この一節はギリシャ語では"Herodii domus dux est eorum"と記される。どう訳するのが正しいのかは分からないが、少なくともここに使われている単語は、「サギ」、「家」、「彼らのリーダー」である。それがどうしたはずみか「このとりはもみの木をそのすまいとする」と訳されてしまうのだ。

しかし、この程度で驚いてはいけぬ。9世紀半ば、ベネディクト修道僧であったラバヌス・マウルスは、自著『事物の本性について』の中で「サギは最も賢い鳥だ」と記している。それはまだいい。この本に記された動物の特性については前述の『フィシオログス』などが情報源となっているし、当時、サギが最も賢い鳥というのはたぶん常識だったのだろう。驚くのは先ほどの箇所の解釈。彼はここをなんと「サギはキリストである」という意味に理解するのである。

西欧の意識に潜むアオサギ

そんな時代が1000年以上も続いた。その後、聖書や神学者の考えがアオサギのイメージを規定する時期はやがて終わりを告げる。しかし、記憶は永続する。当時のアオサギのイメージは現代においても彼らの文化になお脈々と受け継がれている。そして、その証拠を我々はそこかしこに見ることができるのだ。

そういえば、西洋のアオサギの系譜を語る上で、もうひとつ重要な要素があった。ドルイドのことである。キリスト教がヨーロッパ世界を席卷する以前、ガリアやブリテン諸島といったヨーロッパの大部分は、自然崇拜のケルト人たちの土地で占められ、その社会はドルイドと呼ばれる神官たちによって仕切られていた。そして、地方によっては、ドルイドたちはアオサギのイメージを自らに重ね合わせていたようなのだ。ドルイド僧は魔術を用いるとき、片方の手で片目を塞ぎ片足で立つ、いわゆる「サギのポーズ」と呼ばれる姿勢を用いていた。この姿勢をとることで意識を集中させパワーを集めることができたのだという。ともかく、彼らにとってアオサギは特別な存在だったのだ。

時代は下って、18世紀末から19世紀前半のアイランド。詩人であり劇作家でもあるW・B・イェイツは、多くの作品で頻りにアオサギを登場させ、キリストやドルイドの内面をシンボリックに表現することに成功した。さらに、イェイツよりやや遅れて現れたウェールズの詩人、デイラン・トーマスは、自然の聖性のシンボルとしてアオサギをしばしば聖職者に例えている。彼らの作品は西洋のアオサギの文化史を見ていく上で記念碑的な作品群であり、今日なおその輝きは薄れていない。もしかすると、彼らにとってのアオサギは、単に文学上の表現にとどまらず、もっと意識の深い部分まで入り込んでいたのかもしれない。たとえば、デイラン・トーマスは彼の息子を授かったとき、その子にアオサギという名を与えているのである。

ダークサイドに生きる

それでは、日本のアオサギはどうであったか。まずは『万葉集』。4500首以上もの歌が収録されている言わずと知れた最古の歌集だが、サギを詠んだ歌は残念ながらただの一首もない。これはツルを詠んだ歌が45首もあることを思うとやはり奇異な感じは否めない。つまり、万葉の歌人たちの感性も野付の観光客の感性も同じということだろうか。しかし、それではあまりに悲しい。では、『古事記』はどうか。こちらは天若日子の葬儀の場面ともう一ヶ所であらうじてサギが登場する。ただし、役割としてあまり重要でないのでここでは触れない。

平安時代になると、書物にサギが現れる頻度は次第に多くなっていく。『日本霊異記』もそのひとつ。ここでサギが登場するのは「観音の銅像と鷺の形と、奇しき表を示しし縁」というタイトルの話で、池の杭にとまっているサギを子供たちが捕まえようとしたところ、サギは水の中に沈み、サギがとまっていた杭がじつは観音様の銅像であったという内容である。単なる仏教の説話で、とくにサギに意味付けがなされているわけではない。しかし、私にはこの辺が、この国のサギのイメージをおどろおどろしいものへと変えたひとつの分岐点のような気がしてならないのだ。

同じく平安時代には『枕草子』が世に出てくる。おそらく、サギに対する個人の見方を明確に文章にしたのは清少納言が初めてだろう。そこには「鷺は、いとみめも見ぐるし。まなこみなども、うたてよろずになつかしからねど（後略）」とある。現代語に直すと、「鷺は見た目がとても醜い。目つきなども気味が悪いし、何かにつけてかわいくない」というようなことで、もう取り付く島もない。

そんなことで、日本のサギにはあまり良いイメージが定着しなかったようだ。江戸時代になると、このネガティブな見方はますます顕著になる。そして、ついにアオサギは妖怪に貶められてしまうのである。右の絵は江戸中期に活躍した妖怪絵師、鳥山石燕が描いたもので、『画図百鬼夜行』にある「青鷺火」の図。松の木の前におどろおどろしい光を放つ青鷺が見える。左端には「青鷺の年を経しハ夜飛ときハかならず其羽ひかるもの也 目の光に映じ嘴とがりてすさまじきと也」と書かれている。



悲しいことに、このアオサギのイメージは明治後も継承される。泉鏡花や夏目漱石など、小説に妖怪の雰囲気の色濃く残したアオサギを登場させた文人は多い。近いところでは京極夏彦の『姑獲鳥の夏』も挙げられよう。要するに、日本のアオサギは多分に負のイメージを背負ったまま現代に生き続けているのである。

もちろん、日本人のアオサギ観はこのようなものばかりではない。紫式部は『源氏物語』の中でアオサギの奥ゆかしさを認めているし、蕪村や子規のようにアオサギのたたずまいをポジティブに表現した俳人、歌人も多い。蕪村の「夕風や 水青鷺の 脛を打つ」など、前述の鳥山石燕と同時代の句とは思われない澄んだ雰囲気がある。また、更科源蔵のように、アオサギに峻厳さや孤高といったイメージを読み取った詩人もいる。このように、日本のアオサギのイメージに様々なものがあるのは確かなのだ。けれども、日本のアオサギの文化的系譜を辿ったとき、そのイメージにもっとも影響したものが何かと問われれば、妖怪をはじめとしたダークサイドに生きるアオサギのイメージが否応なく大きく浮かび上がってくるのである。

八百万の神の国に暮らす

ここまで、ヨーロッパと日本におけるアオサギのイメージの変遷を簡単に見てきた。紹介の仕方に偏りはあるが、ともかく、西欧と日本のアオサギに対するイメージがかなり異なっているのは間違いないと思う。しかし、イメージというものが人々の行動にどれほどの影響をもつのかを考えたとき、しばしばその力に限界があるのを感じざるを得ない。たとえば、アオサギに良いイメージを抱いていたはずのヨーロッパの人々が、20世紀半ば、漁業に害を及ぼすということでアオサギを徹底的に駆除してしまったのだ。その結果、ヨーロッパのアオサギは一時期、絶滅寸前になったのである。

それに比べると日本の状況はまだしも平穏に思える。ときに個人や小さなコミュニティが考えられないような暴挙に出ることはあるが、全体として見れば、そこそこ自製の効いたアオサギとの付き合いができていように思う。けれども、それは結果であって人々が積極的にそのような状況をつくりだしているとは言いがたい。こうしてみると、イメージの力というのは、状況の悪化を食い止めることより、むしろ、良い状況をさらに盛り立てる場合により効力を発揮するものなのかもしれない。

このように書いてくると、なんだか日本のアオサギをとりまく状況をずいぶん悲観している感じがしないでもない。が、むしろ私は日本のアオサギには潜在的に素晴らしいイメージが与えられていると思うのである。仏教が日本に渡来する前、さらには万葉や記紀よりも前の時代、この国の人々にとってサギは特別な存在だったかもしれないのだ。

当時の日本は稲作を中心に社会が動き、その年の米の獲れ具合が人々の最大の関心事であったはずである。そのような社会では、人々は田んぼの神様に豊作を祈願する。当時、田の神は一般に「サの神」と呼ばれており、この名は地方によっては現在もまだ残っている。サの神は毎年、田植えの季節になると山から里に降りてくる。時は五月（サツキ）、五月雨（サミダレ）の降る季節である。そこでは早乙女（サオトメ）たちが早苗（サナエ）を植えている。サの神が鎮座するのはもちろん桜（サクラ）の木。人々はこの木の下で豊作を祈って、サの神に酒（サケ）や魚（サカナ）を供えるのである。ここまでは一般によく知られた話。しかし、それならそこに鷺（サギ）がいて何の不思議があるだろう。サギはサの神の見守る田んぼに飛来する。サの神の御使として、あるいはサの神そのものとして飛来するのである。

かつて日本は八百万の神の住まう国だった。そして、おそらくは今でもそうなのだ。現在、この国は仏教や西洋の文化、思想など様々なフィルターがかかって見えにくくなっているけれども、じっと目を凝らせば、八百万の神々の国はいつでもそこにある、と私は思う。

「サの神の 田に来たるらし 鷺の声」 春鋤

サギが穀霊とされた昔があった。そのイメージは、日本人の意識の深層に今なお静かに息づいている。



【北海道野鳥愛護会会報『北海道野鳥だより』第165号（2011年）寄稿】